

カズイヌチカ

森鷗外

青空文庫

父が開業をしていたので、花房はなぶさ医学士は卒業する少し前から、休課に父の許もとへ来ている間は、代診の真似事まねごとをしていた。

花房の父の診療所は、大千住おおせんじゆにあったが、小金井きみ子という女が「千住の家」というものを書いて、委しくこの家の事を叙述しているから、Loco《ロコ》citato《チタト》としてここには贅ぜいせない。Monet《モネエ》なんぞは同じ池に同じ水草の生はえている処を何遍も書いていて、時候が違い、天気の違い、一日のうちでも朝夕の日当りの違うのを、人に味あじわわせるから、一枚見るよりは較べて見る方が面白い。それは巧妙な芸術家の事である。同じモデルの写生を下へ手に繰り返されては、たまつたものではない。ここらで省筆せいひつをするのは、読者に感謝して貰もらつても好い。

尤ももつときみ子はその家の歴史を書いていかなかった。あれを建てた緒方某おがたぼうは千住の旧家で、徳川将軍が鷹狩たかがりの時、千住で小休みをする度たびごと毎に、緒方の家が御用を承うねることに極きまつていた。花房の父があの家をがらくたと一しよに買い取つた時、天井裏から長さ三尺ばかりの細長い箱が出た。蓋ふたに御鋪物おんしきものと書いてある。御鋪物とは将軍の鋪物である。今は花房の家で、その箱に掛物が入れてある。

火事にも逢わずに、だいぶ久しく立っている家と見えて、頗ぶる古びが附いていた。柱なんぞは黒檀のように光っていた。硝子の器を載せた春慶塗の卓や、白いシイツを掩うた診察用の寝台が、この柱と異様なコントラストをなしていた。

この卓や寝台の置いてある診察室は、南向きの、一番広い間で、花房の父が大きい籬棚のような台を据えて、盆栽を並べて置くのは、この室の前の庭であつた。病人を見て疲れると、この髻の長い翁は、目を棚の上の盆栽に移して、私かに自ら娛むのであつた。待合にしてある次の間には幾ら病人が溜まつていても、翁は小さい煙管で雲井を吹かしながら、ゆっくり盆栽を眺めていた。

午前一度、午後一度は、極まつて三十分ばかり休む。その時は待合の病人の中を通り抜けて、北向きの小部屋に這入つて、煎茶を飲む。中年の頃、石州流の茶をしていたのが、晩年に国を去つて東京に出た頃から碾茶を止めて、煎茶を飲むことにした。盆栽と煎茶とが翁の道楽であつた。

この北向きの室は、家じゆうで一番狭い間で、三畳敷である。何の手入もしないに、年々宿根が残つていて、秋海棠が敷居と平らに育つた。その直ぐ向うは木槿の生垣で、垣の内側には疎らに高い棕櫚が立っていた。

花房が大学にいる頃も、官立病院に勤めるようになってからも、休日に帰って来ると、先ずこの三畳で煎茶を飲ませられる。当時八犬伝に読み耽つていた花房は、これをお父うさんの「三茶の礼」と名づけていた。

翁が特に愛していた、蝦蟇出という朱泥の急須がある。径二寸もあるうかと思われ、小さい急須の代赭色の膚に *Pemphigus* 《ペンフィグス》という水泡のような、大小種々の疣が出来ている。多分焼く時に出来損ねたのであろう。この蝦蟇出の急須に絹糸の切屑のように細かくよじれた、暗緑色の宇治茶を入れて、それに冷ました湯を注いで、暫く待っていて、茶碗に滴らす。茶碗の底には五立方センチメートル位の濃い帯緑黄色の汁が落ちている。花房はそれを舐めさせられるのである。

甘みは微かで、苦みの勝つたこの茶をも、花房は翁の微笑と共に味わって、それを埋合せにしていた。

或日こう云う対坐の時、花房が云つた。

「お父うさん。わたくしも大分理窟だけは覚えました。少しお手伝をしましょうか」

「そうじやろう。理窟はわしよりはえらいに違いない。むずかしい病人があつたら、見て貰おう」

この話をしてから、花房は病人をちよいちよい見るようになったのであった。そして翁の満足を贏ち得ることも折々あった。

翁の医学は Hufeland 《フウフェランド》の内科を主としたもので、その頃もう古くなつて用立たないことが多かった。そこで翁は新しい翻訳書を幾らか見るようにしていた。素とフウフェランドは蘭らんや訳の書を先輩の日本訳の書に引き較べて見たのであるが、新しい蘭書を得ることが容易たやすくなかつたのと、多くの障しょうがい碍がいを凌しのいで横おうぶん文の書を読もうとする程の氣力がなかつたとの為ために、昔読み馴れた書でない洋書を読むことを、翁は面倒がつて、とうとう翻訳書ばかり見るようになったのである。ところが、その翻訳書の数かずが多くないのに、善い訳は少ないので、翁の新しい医学の上の智識すこぶには頗る不十分な処がある。

防腐外科なんぞは、翁は分っている積りでも、實際本当には分からなかつた。丁寧に消毒した手を有ありあわせ合あの手拭てぬぐいで拭ふくような事が、いつまでも止まなかつた。

これに反して、若い花房がどうしても企て及ばないと思つたのは、一種の Coup 《クウ》 [die Gil] 《ドヨイユ》であつた。「この病人はもう一日は持たん」と翁が云うと、その病人はきつと二十四時間以内に死ぬる。それが花房にはどう見ても分からなかつた。

只これだけなら、少花房が経験の上で老花房に及ばないと云うに過ぎないが、実はそうでは無い。翁の及ぶべからざる処が別に有ったのである。

翁は病人を見ている間は、全幅の精神を以て病人を見ている。そしてその病人が軽かろうが重かろうが、鼻風だろうが必死の病だろうが、同じ態度でこれに対してしている。盆栽を翫もてあそんでいる時もその通りである。茶を啜すすっている時もその通りである。

花房学士は何かしたい事もし若くはする筈はずの事があつて、それをせずに姑しばりく病人を見ているという心持である。それだから、同じ病人を見ても、平凡な病だどつまらなく思う。「[三 te'essant] 《エントレッツサン》の病症でなくては厭あき足らなく思う。又偶々たまたま所謂興味ある病症を見ても、それを研究して書いて置いて、業績として公にしようとも思わなかつた。勿論もちろん発見も発明も出来るならしよとは思うが、それを生活の目的だとは思わない。始終何か更にしたい事、する筈の事があるように思っている。しかしそのしたい事、する筈の事はなんだか分からない。或時は何物かが幻影の如くに浮んでも、捕捉することの出来ないうちに消えてしまう。女の形をしている時もある。種々の栄華の夢になっている時もある。それかと思うと、その頃碧巖へきがんを見たり無門関むもんかんを見たりしたので、ぜんじよ禪ぜん定めいた contemplatif 《コンタン普拉チーフ》な観念になつていゝる時もある。とにかく

取留めのないものであった。それが病人を見る時ばかりではない。何をしていても同じ事で、これをしてしまつて、片付けて置いて、それからというような考をしている。それからどうするのだから分らない。

そして花房はその分らない或物が何物だということを、強いて分からせようともしなかつた。唯或時はその或物を幸福というものだと考えて見たり、或時はそれを希望ということに結び付けて見たりする。その癖又それを得れば成功で、失えば失敗だというような処までは追求しなかつたのである。

しかしこの或物が父に無いということだけは、花房も疾くに気が付いて、初めは父がつまらない、内容の無い生活をしているように思つて、それは老人だからだ、老人のつまらないのは当然だと思つた。そのうち、熊沢蕃くまざわばんざん山の書いたものを読んでみると、志を得て天下国家を事とするのも道を行うのであるが、平生顔を洗つたり髪を梳つたりするの道を行うのであるという意味の事が書いてあつた。花房はそれを見て、父の平生を考え見ると、自分が遠い向うに或物を望んで、目前の事を好い加減に済ませて行くのに反して、父はつまらない日常の事にも全幅の精神を傾注していることに気が附いた。宿場の医者たるに安んじている父の〔re'signation〕《レジニアション》の態度が、有道

者の面目に近いということが、臃おぼろげ気ながら見えて来た。そしてその時から遽にわかに父を尊敬する念を生じた。

実際花房の気の付いた通りに、翁の及び難いところはここに存ぞんじていたのである。

花房は大学を卒業して官吏になって、半年ばかりも病院で勤めていただろう。それから後は学校教師になって、Laboratorium 《ラボラトリウム》に出しゅつ入にゅうするばかりで、病人というものを扱った事が無い。それだから花房の記憶には、いつまでも千住の家で、父の代診をした時の事が残っている。それが医学をした花房の医者らしい生活をした短い期間であった。

その花房の記憶に僅わずかに残っている事を二つ三つ書く。一体医者のためには、軽い病人も重い病人も、贅ぜいたくぐすり沢薬を飲む人も、病気が死活問題になっている人も、均ひとしくこれ。asus 《カズス》である。Casus 《カズス》として取り扱って、感動せず、冷眼に視している処に医者**の強みがある**。しかし花房はそういう境界には到らずにしまった。花房はまだ病人が人間に見えているうちに、病人を扱わないようになってしまった。そしてその記憶には唯 Curiosa 《クリオザ》が残っている。作者が漫然と医者の術語を用いて、いれに Casistica 《カズイステチカ》と題するのは、花房の冤えん枉わうとする所かも知れない。

落架風^{らつかふう}。花房が父に手伝をしようと云つてから、間のない時の事であつた。丁度新年

で、門口に羽根を衝^ついていた、花房の妹の藤子が、きやつと云つて奥の間へ飛び込んで来た。花月新誌の新年号を見ていた花房が、なんだと問うと、恐ろしい顔の病人が来たと云う。どんな顔かと問えば、只食い付きそうな顔をしていたから、二目と見ずに逃げて這入つたと云う。そこへ佐藤という、色の白い、髪を長くしている、越後生^{えちご}れの書生が来て花房に云つた。

「老先生が一寸お出下^{ちよつと}さるようにと仰^{おつし}やいますか」

「そうか」

と云つて、花房は直ぐに書生と一しよに広間に出た。

春慶塗^{はるけいぬ}の、楕円^{だえんけい}形^{がた}をしてしている卓の向うに、翁はにこにこした顔をして、椅子^{いす}に倚^より掛かつていたが、花房に「あの病人を御覽^{ごらん}」と云つて、顔で方角を示した。

寝台^{ねだい}の据えてあるあたりの畳の上に、四十^{しじゅう}余りのお上^{かみ}さんと、二十^{はたち}ばかりの青年とが据わっている。藤子が食い付きそうだと云つたのは、この青年の顔であつた。

色の蒼白^{あおしろ}い、面長^{おもなが}な男である。下顎^{したあご}を後下方^{こうかほう}へ引つ張っているように、口を開^あいているので、その長い顔が殆ど二倍の長さに引き延ばされている。絶えず涎^{よだれ}が垂れるの

で、畳んだ手拭で腮あごを拭いている。顔位の狭い面積の処で、一部を強く引つ張れば、全体の形が變つて来る。醜くくはない顔の大きい目が、外眦がいさいを引き下げられて、異様に開ひらいて、物に驚いたように正面を凝視している。藤子が食い付きそうだと云つたのも無理はない。

附き添つて来たお上さんは、目の縁ふちを赤くして、涙声で一度翁に訴えた通りを又花房に訴えた。

お上さんの内には昨夜骨牌会ゆうべかるたかいがあつた。息子さんは誰たれやらと札の引張合ひきあいをして勝つたのが愉快だといふので、大声に笑つた拍子に、顎あごが両方一度に脱はずれた。それから大騒ぎになつて、近所の医者に見て貰つたが、嵌はめてはくれなかつた。このままで直らなかつたらどうしようといふので、息子よりはお上さんが心配して、とうとう寐ねられなかつたといふのである。

「どうだね」

と、翁は微笑ほほえみながら、若い学士の顔を見て云つた。

「そうですね。診断は僕もお上さんに同意します。両側下顎脱臼りょうそくかがくだつきゆうです。昨夜脱臼ゆうべしたのなら、直ぐに整復が出来る見込です」

「遣つて御覽」

花房は佐藤にガアゼを持つて来させて、両手の拇指を厚く巻いて、それを口に挿入れて、下顎を左右二箇所を押えたと思うと、後部を下へぐつと押し下げた。手を緩めると、顎は見事に嵌まつてしまった。

二十の涎繰りは、今まで腮を押えていた手拭で涙を拭いた。お上さんも袂から手拭を出して嬉し涙を拭いた。

花房はしたり顔に父の顔を見た。父は相変らず微笑んでいる。

「解剖を知っておるだけの事はあるのう。始てのようではなかった」

親子が喜び勇んで帰った迹で、翁は語を続いでこう云った。

「下顎の脱臼は昔は落架風と云つて、或る大家は整復の秘密を人に見られんように、大風炉敷を病人の頭から被せて置いて、術を施したものだよ。骨の形さえ知っていれば秘密は無い。皿の前の下へ向いて飛び出している処を、背後へ越させるだけの事だ。学問は難有いものじゃのう」

一枚板。これは夏のことであつた。瓶有村の百姓が来て、俵が一枚板になつたから、来て見て貰いたいと云つた。佐藤が色々容態を問うて見ても、只繰り返して一枚板になつ

たというばかりで、その外にはなんにも言わない。言うすべを知らないのであろう。翁は聞いて、丁度暑中休みで帰っていた花房に、なんだか分からないが、余り珍らしい話だから、往つて見る気は無いかと云つた。

花房は別に面白い事があるとも思わないが、訴えの詞ことばに多少の好奇心を動かされないでもない。とにかく自分が行くことにした。

蒸暑い日の日盛りに、車で風を切つて行くのは、却かえつて内うちにいるよりは好い心持であつた。田と田との間に、堤のように高く築き上げてある、長い長いなわてみち 暇なわてみち 道を、汗を拭きながらひ 歩いて行く定吉に「暑かろうなあ」と云えば「なあに、寝ていたつて、暑いのは同じ事ことでさあ」と云う。一本一本の榛はんの木から起る蝉せみの声に、空気の全体が微かすかに顫ふるえているようである。

三時頃に病家に著いた。杉の生垣いけがきの切れた処に、柴折戸しおりとのような一枚の扉とびらを取り付けた門を這入ると、土を堅く踏み固めた、広い庭がある。穀物を扱う処である。乾き切つた黄いろい土の上に日が一ぱいに照つている。狭く囲まれた処に這入つたので、蝉の聲が耳を塞ふさいぎたい程やかましく聞える。その外には何の物音もない。村じゆうが午ひるやす休みやすをしている時刻なのである。

庭の向うに、横に長方形に立ててある藁葺の家が、建具を悉くはずして、開け放つてある。東京近在の百姓家の常で、向つて右に台所や土間が取つてあつて左の可なり広い処を畳敷にしてあるのが、只一目に見渡される。

縁側なしに造つた家の敷居、鴨居から柱、天井、壁、畳まで、bitume 《ビチュウム》の勝つた画のように、濃淡種々の茶褐色に染まつている。正面の背景になつてゐる、濃い褐色に光つてゐる戸棚の板戸の前に、煎餅布団を敷いて、病人が寝かしてある。家族の男女が三四人、涅槃図を見たように、それを取り巻いてゐる。まだ余りよごれてゐない、病人の白地の浴衣が真白に、西洋の古い戦争の油画で、よく真中にかいてある白馬のように、目を刺激するばかりで、周囲の人物も皆褐色である。

「お医者様が来ておくんなされた」

と誰やらが云つたばかりで、起つて出迎えようともしない。男も女も熱心に病人を目守つてゐるらしい。

花房の背後に附いて来た定吉は、左の手で汗を拭きながら、提げて来た薬籠の風呂敷包を敷居の際に置いて、台所の先きの井戸へ駈けて行つた。直ぐにきいきいと轆轤の軋る音、ざっざつと水を翻す音がする。

花房は暫く敷居の前に立つて、内の様子を見ていた。病人は十二三の男の子である。熱帯地方の子供かと思うように、ひどく日に焼けた膚の色が、白地の浴衣で引っ立って見える。筋肉の緊しまった、細く固く出来た体だということが一目で知れる。

暫く見ていた花房は、駒下駄こまげたを脱ぎ棄てて、一足敷居の上に上がった。その刹那せつなの事である。病人は釣り上げた鯉こいのように、煎餅布団の上で跳ね上がった。

花房は右の片足を敷居に踏み掛けたままで、はつと思つて、左を床の上へ運ぶことを躊躇ゆうちよした。

横に三畳の畳を隔てて、花房が敷居に踏み掛けた足の衝突とうとつが、波動を病人の体に及ぼして、微細な刺戟が猛烈な全身の痙攣けいれんを誘いざない起したのである。

家族が皆じつとして据わつていて、起つて客を迎えなかつたのは、百姓の礼儀を知らない為めばかりではなかつた。

診断は左の足を床の上に運ぶ時に附いてしまった。破傷風である。

花房はそつと傍そばに歩み寄つた。そして手を触れずに、やや久しく望診していた。一枚の浴衣を、胸をあらわして著ているので、殆ど裸体も同じ事である。全身の筋肉が緊縮して、体は板のようになっていて、それが周囲のあらゆる微細な動揺ほんおうに反応して、痙攣を起す。

これは学術上の現症記事ではないから、一々の徴候は書かない。しかし卒業して間もない花房が、まだ頭にそっくり持っていた、内科各論の中の破傷風の徴候が、何一つ遺れられずに、印刷したように目前に現れていたのである。鼻の頭に真珠を並べたように滲み出している汗までが、約束通りに、遺れられずにいた。

一枚板とは実に簡にして尽した報告である。知識の私に累せられない、純樸な百姓の自然の口からでなくては、こんな詞の出ようが無い。あの報告は生活の印象主義者の報告であった。

花房は八犬伝の犬塚信乃の容体に、少しも破傷風らしい処が無かったのを思い出して、心の中に可笑しく思った。

傍にいた両親の交る交る話すのを聞けば、この大切な一人息子は、夏になってから毎日裏の池で泳いでいたということである。体中に掻きむしったような瘰癧の絶えない男の子であるから、病原菌の浸入口はどこだか分からなかった。

花房は興味ある CASUS 《カズス》 だと思つて、父に頼んでこの病人の治療を一人で受け持った。そしてその経過を見に、度々瓶有村の農家へ、炎天を侵して出掛けた。途中でひどい夕立に逢つて困つた事もある。

病人は恐ろしい大量の Chloral 《クロラル》を飲んで平気でいて、とうとう全快してしまつた。

生理的腫瘍^{しゅよう}。秋の末で、南向きの広間の前の庭に、木葉が掃いても掃いても溜^たまる頃であつた。丁度土曜日なので、花房は泊り掛けに父の家へ来て、診察室の西^{にし}南^{みなみ}に新しく建て増した亜鉛^{トタンぶき}葺の調剤室と、その向うに古い棗^{なつめ}の木の下に建ててある同じ亜鉛葺の車小屋との間の一坪ばかりの土地に、その年沢山実のなつた錦荔枝^{れいし}の蔓^{つる}の枯れているのをむしつていた。

その時調剤室の硝子^{ガラスまど}窓を開けて、佐藤が首を出した。

「一寸^{ちよつと}若先生に御覽を願いたい患者がごいますか」

「むずかしい病気なのかね。もうお父^とさんが帰つてお出^{いで}になるだろうから、待^{また}せて置けば好^{よい}いじゃないか」

「しかしもうだいが長く待せてあります。今日の最終の患者ですから」

「そうか。もう跡^{あと}は皆^{みんな}な帰つたのか。道理でひどく静かになつたと思つた。それじゃあ余り待たせても気の毒だから、僕が見ても好い。一体どんな病人だね」

「もう土地の医師の処を二三軒廻つて来た婦人の患者です。最初誰かに脹^{ちようまん}満^{まん}だと云わ

れたので、水を取つて貰うには、外科のお医者様が好かろうと思つて、誰かの処へ行くと、どうも堅いから瘡がんかも知れないと云つて、針を刺してくれなかつたと云うのです」

「それじゃあ腹水か、腹腔ふくこうの腫瘍かという問題なのだね。君は見たのかい」

「ええ。波動はありません。既往症を聞いて見ても、肝臓に何か来そうな、取り留めた事実もないのです。酒はどうかと云うと、厭いやではないと云います。はてなと思つて好く聞いて見ると、飲んでも二三杯だと云うのですから、まさか肝臓に変化を来きたす程のこともないだろうと思います。栄養は中等です。悪性腫瘍らしい処は少しもありません」

「ふん。とにかく見よう。今手を洗つて行くから、待つてくれ給え。一体医者が手をこなにしてはたまらないね、君」

花房は前へ出した両手の指のよごれたのを、屈かがめて広げて、人に掴つかみ付きそうな風をして、佐藤に見せて笑つている。

佐藤が窓を締めて引つ込んでから、花房はゆっくり手を洗つて診察室に這入つた。

例の寝台の脚あしの処に、二十二三の櫛くし巻まきの女が、半襟はんえりの掛かつた銘めい撰せんの半纏はんてんを着て、絹のはでな前掛むなだかを胸むな高たかに締めて、右の手を畳つに衝ついて、体を斜かたにして据すわつていた。琥珀色こはくいろを帯びた円い顔の、目の縁ふちが薄赤い。その目でちよいと花房を見て、直ぐに下

を向いてしまった。Cliente 《クリアント》としてこれに対している花房も、ひどく媚こびのある目だと思つた。

「寝台に寝させましようか」

と、附いて来た佐藤が、知れ切つた事を世話焼顔に云つた。

「そう」

若先生に見て戴いたくのだからと断つて、佐藤が女に再び寝台に寝ることを命じた。女は壁の方に向いて、前掛と帯と何本かの紐ひもとを、随分気長に解いている。

「先生が御覧になるかも知れないと思つて、さつきそのまま待っているように云つたのですが」

と、佐藤は言分けらしくつぶやいた。掛布団もない寝台の上でそのまま待てとは女の心を知らない命令であつたかも知れない。

女は寝た。

「膝ひざを立てて、楽に息をしてお出いで」

と云つて、花房は暫く擦すり合せていた両手の平を、女の腹に当てた。そしてちよいと押えて見たかと思つたと「聴診器を」と云つた。

花房は佐藤の卓の上から取って渡す聴診器を受け取って、臍へその近処に当てて左の手で女の脈を取りながら、聴診していたが「もう宜よろしい」と云って寝台を離れた。

「ちよつと着物の前を掻き合せて、起き上がろうとした。」
「ちよつとそうして待つていて下さい」

と、花房が止めた。

花房に黙つて顔を見られて、佐藤は機嫌きげんを伺うように、小声で云つた。

「なんでございましょう」

「腫瘍は腫瘍だが、生理的腫瘍だ」

「生理的腫瘍」

と、無意味に繰り返して、佐藤は呆あきれたような顔をしている。

花房は聴診器を佐藤の手に渡した。

「ちよつと聴いて見給え。胎児の心音が好く聞える。手の脈と一致している母体の心音よりは度数が早いからね。」

佐藤は黙つて聴診してしまつて、忸怩じくじたるものがあつた。

「よく話して聞きかせて遣やつてくれ給え。まあ、套管針とうかんしんなんぞを立てられなくて為しあ合せだつ

た」

こう云って置いて、花房は診察室を出た。

子が無くて夫に別れてから、裁縫をして一人で暮している女なので、外の医者は妊娠に気が附かなかつたのである。

この女の家の門口に懸かっている「御仕立物」とお家で書いた看板の下を潜って、若い小学教員が一人度々出入をしていたということが、後になつて評判せられた。

青空文庫情報

底本：「山椒大夫・高瀬舟」新潮文庫、新潮社

1968（昭和43）年5月30日発行

1985（昭和60）年6月10日41刷改版

1990（平成2）年5月30日53刷

※底本には、表記の変更に関する以下の注記が見られる。

「本書は旧仮名づかいで書かれていたものを（中略）、現代仮名づかいに改めた。」

加えて、極端な宛て字と思われるもの、代名詞、副詞、接続詞などは、以下のように書き換えたとある。

…か知ら↓…かしら 此↓かく 彼此↓かれこれ …切り↓…きり 此↓これ 是↓これ
流石↓さすが 併し↓しかし 切角↓せつかく 其↓その 大ぶ↓だいぶ …丈↓…だ
け 兎角↓とにかく 所で↓ところで 只管↓ひたすら 迄↓まで 儘↓まま 矢張↓や
はり

入力：砂場清隆

校正：松永正敏

2000年8月9日公開

2006年5月11日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

カズイステカ

森鷗外

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>